

1、琉球郵便 廃止直前 駆け込み発行？

No.1、琉球切手と切手少年の思い出

廃墟の中 黒インクと画用紙から 琉球切手 生まれた

郵便切手は、その国の小さな博物館とさえ言われている。

その国の歴史や民俗、風物のみならず、時には心や時代精神が反映されている。

琉球郵便切手も、戦後 27 年間の歴史を映し、沖縄の心を、思いを託していた。

米軍政統治下で、一国並みに切手発行の権能が付与された経緯が面白い。

1948 年(昭和 23 年)、島内の通信が許可されて、廃墟の中から郵政事業はスタートした。

当初は郵便配達は無料だったが、軍作業で賃金制度が導入され、通貨が軍票B円に統一されて、配達は有料制に移行した。

そんなある日、米軍郵便係官将校が比嘉秀太郎(元沖縄民政府郵便係)を訪れた。黒インクと画用紙をもって来て、これで切手の図案を描いてほしいと言った。比嘉は驚いて断った。当時は図案の参考になるものはない、

切手すらない、鉛筆はおろか、絵具、紙一枚とてなかった。

インクとペンだけでどうにもならない。だが、米軍の命令であり、引き受けざるを得なかった。



上：原画作者の比嘉秀太郎
下：第 1 次通常郵便切手
(1948.7.1 発行)

最初はアメリカの切手を真似ることを思いついたが、戦争に負けたからといって、切手まで真似る必要はないと思い直し、沖縄独特のものをというので「琉球王朝の紋章」や「守礼の門」などを描いた。だがそのデザインは東京のマッカーサー司令部の許可がおりずに却下された。..もう一度描きなおせ、といわれてくさっていたが、切手の図案を描くことは単に自分自身のためではなく、沖縄のためなのだと気をとりなおして描き直したのが、沖縄の植物や風物をあしらった、そてつ、ゆり、琉球船、人物(農夫)の図案だった。

これはすぐに許可されたとみえて、係の将校は私の頼んでおいた絵具、筆、絹、紙などのみやげを置いて帰っていった。絵を描くことが趣味だったからだが、こうしてはじめての琉球切手が 1947 年 7 月に発行されたのだった。

(「インクで描いた最初の琉球切手」 比嘉秀太郎

「沖縄切手のふるさと」 昭和 48 年 3 月刊)

第 1 次通常郵便切手(7 種)の誕生である。

このように、琉球切手は、廃墟の中で黒インクと画用紙からスタートし、大きく発展し、沖縄美術の珠玉とも称されるほどになった。

南島の著名な画家たち一山田真山、名渡山愛順、大嶺政寛、安谷屋正義、玉那覇正吉、大城皓也、伊差川新、安次富長昭画伯らが原画を描いた。

ほどなく、南国的デザインと色鮮やかさで、切手愛好家を魅了するまでになった。

海外からも注文が殺到して、人気は絶大だった。

発売日には長蛇の列ができるほど好評を博していた。

子供たちにも 琉球切手ブーム 文通ブーム 拍車かける？

沖縄の子供たち一とりわけ男の子の間でも、琉球切手ブームだった。

私が切手集めを始めたのは、小 5 年頃である。周りの先輩たちも、友人の多くも、切手少年になっていた。それに拍車かけたのが、戦後起こった文通ブームではなかったか。

当時の「少年」「漫画王」「冒険王」など雑誌にも、「郵便友の会」？欄が作られ、「ペンフレンド求めます」の名前が掲載されていた。

私のいた壺屋小学校にも、「アメリカ軍政下にある沖縄の子供たちへ励ましの綴り方」と一緒に、文通したいと、手紙がわんさと送られてきた。

私も、関東から送られてきた手紙の中の一人と、文通したことがある。もともと1年ほどしか続かなかったが・・・当時、ペンフレンドとの贈り物交換は、名所旧跡の絵葉書や本のしおり、草花の押し葉、切手などだった。琉球切手を送り、とても喜ばれたことを覚えている。

そういうこともあってか、周辺では競って琉球切手集めに熱中していた。

熱心のあまり、届いた手紙が未開封なのに、勝手に切手を切り取って、親に怒られたりもした。

男の子たちは集まれば、切手の話になり、それに感化されて、切手少年たちは増えていった。

文具店には、切手を保管するストックブック揃えた店もあり、少年たちを応援していた。

琉球切手を売買する切手店もあり、自分の切手を売ったり、小遣い銭を貯めては、欲しい切手を手に入れるのを楽しみにしていた。切手カタログには、どんな切手が発行され、どの位の価値があるか記され、いつのまにか、そらんじるまでになっていた。

切手少年たちの楽しみは、お互いのストックブックを持ち寄って、収集した自慢の切手を見せ合うことだった。また、これは各自の収集力量を評価する場でもあった。

相手が自分より、価値ある切手を持っていたら、羨望と尊敬の念を持ち、ランクを格上げした。

その逆だと、自分の方が上だと、優越感を持ち、ランクを下げた。

また、欲しい切手があれば、交換し合う場でもあった。

この等価交換に際して、先方の出方を見ながら交渉をするわけだが、これは価値ある切手だからと、有利な交換条件を申し出て、自分の欲しい切手を手に入れるかけひき上手な少年もいた。

当時、切手少年たちが、価値あるものとして、欲しがったのは、琉球三大記念切手だった。

最初に発行された琉球大学開校、蔡温植林、琉球政府創立記念切手である。



- ①琉球大学開校記念:発行 1951.2.12) 原画:安次富長昭
 ②蔡温植林記念:(同 1951.2.19) 同:安谷屋正義
 ③琉球政府創立記念:(同 1952.4.1) 同:安次富長昭
 第一次通常切手の「琉球郵便」から①「RYUKYUS POSTAGE」になり、また②③では元に戻っている

中学校近くに 琉球郵政庁郵券課 切手発行日 愛好家で賑わう

私の切手収集熱は、中学に入ると、さらに過熱した。

那覇中学校の近くに、500メートルほど離れた場所に那覇中央郵便局があった。

先輩から、あそこに、“ユウケンカ”がある、そこに行けば、たくさんの種類の琉球切手が買える。

また、切手発行の日は、そこでは、記念スタンプを押すことができる、と教えてくれた。

初めて聞く“ユウケンカ”という言葉に、いったいどんな所だろうか興味を抱いた。

早速、学校帰りに寄ってみた。なるほど大きな、立派な建物だった。

正面看板には、「琉球政府 通商産業局 郵政庁 那覇中央郵便局、..」とあった。

あとで、郵政庁というのは、沖縄の郵便業務を統括している所だと知った。

先輩が話していた“ユウケンカ”というのは、この郵政庁の中にあった。

“郵券課”と書かれ、そこは、琉球切手を企画し、発行している所だと分かった。

ここは、学校帰りに寄ることができ、切手を買うにも便利であり、よく利用するようになった。

1年ほど経たある日。いつものように切手を買って求めたら。

たまたま、ペルリ来航の記念切手(1953年発行)が郵券課?の窓口で買える大発見をした。5年前に発行した切手で、他所ではとっくに売り切れており、そこに残っているのが奇跡に近かった。



宝ものを見つけたように大喜び、1シート(切手50面)を買って 購入した。切手仲間の誰にも話さない。

ペルリ交流百年記念(発行:1953.5.26)
原画:山田真山

自分だけの秘密にして、幸運を独り占めした。

購入したこのペルリ切手は、仲間との欲しい切手の交換用に使った。

また、なじみの切手屋にも、素知らぬ顔で、売りにいってみることにした。

切手屋の親父は、あそこで買えると、全く知らない。これ幸い、高くで買ってくれた。

これで味しめて、郵券課と切手屋を、何度か往復して、シート単位で売りさばいた。

しまいには、なぜに、中学生如きが、シート何枚も持っているのかと、怪しまれて、とうとうバレてしまった。でも、お陰で、何シートも買ってもらい、相当儲けて、軍資金づくりができた。

これで欲しかった切手を幾つか手に入れた。中2の頃の懐かしい思い出である。
中央郵便局カウンター広場は、切手発行の日となれば、愛好家が大勢押しかけて賑わった。
切手少年たちも、その日は大忙しだった。朝からソワソワと落ち着きがなかった。
授業はとでも身に入らない。早めに学校を終え、買い求めにいかねばならない。
その日のために小遣いを貯め用意万端だ。待ちきれずに、先生の目を盗んで、教室から抜け出す輩もいた。あたふたと駆け込み、大人たちに混じって、切手購入や初日カバー作りに励んだ。
切手少年たちにとって、中央郵便局、郵券課は、重宝すべき所だった。



上左: 沖縄の郵便業務を統括していた琉球郵政庁ビル(那覇市久米町)。この中に、那覇中央郵便局、郵券課があった。(「沖縄県公文書館」)

下右: カウンターフロア
ここは切手発行日には
愛好家で賑わった。
(「那覇市歴史博物館」)



切手発行日に、記念スタンプを押して作る初日カバーも人気があった。
大人たちは、記念切手にちなんだ図柄をカラー印刷した封筒を作成し、これに切手を貼り、記念スタンプを押す。少年たちは金がないので、これを手作りするのもいた。
私の場合もそうだった。
次頁に示したのが「守礼門復元記念」の初日カバーである。
これは、守礼門の図柄をゴム板に彫り、これを刷って手作りのものである。
切手に、朱色で「守礼門復元記念 1958.10.15 那覇中央」の記念スタンプが押されている。
この手作り封筒を何枚も用意し、記念スタンプを押していたら、大人たちに、「これ君が作ったのか、よくできている」(笑)と褒められた。だが、どう見ても下作である。
当時の沖縄の切手少年たちの雰囲気を知る上で、参考になればと思い紹介した。



手製の初日カバー
 (「守礼門復元記念」発行 1958.10.15)
 原画:伊差川新

超高価・琉球二大切手 & 伝説のコレクター”マエシロイサム”のこと

那覇界限には、切手屋が数か所あった。と云っても、切手好きな親父が四畳半ほどの部屋に座って切手売買しているような所だった。

私が通った店は、開南近くにあり、先のペルリ記念切手を買ってくれた所だ。

ここの親父も机に何やら広げ、いつもうつむいて仕事していた。

お得意さんの殆どは子供たちで、小遣い銭稼ぎで、使用済切手をよく売りに来ていた。

これら買い取り、東京の業者?へ送っていたようだ。

ある時、前々から欲しかった「龍頭切手」を買いに行った。

これは第二次通常切手(1950.1.21 発行)6種の中で一番高価な切手だった。小遣い銭も貯まったので、やっと手に入れることができるかと心はずんでいた。ところが、開いてくれた販売用切手入れたストックブックに一枚もなかったのに、がっかりした。

親父さんは、『これ人気があるから、すぐなくなるんだ。奥にあるから』と言って、シート(切手 100 面)を持ってきたのに驚いた。

しかも何シートも、手にしている。シートから、切手一枚、一枚を切り離しているようすを見ながら考えた。龍頭切手はとても高価だ。これを何シートも持っている。ものすごい値うちだ。それだけではない。部屋の奥にも、高価な切手がたくさんあるに違いない。

切手屋親父は、ほんとにお金持ちだ。百万長者なんだ、すごいと思った。

(今は、当時に比較すると琉球切手の価値は、だいぶ下落している感じがする)

琉球切手の中で、最も高価なものは、久米島切手と改定 100 圓切手である。

どの位の価値があるの? 値段は幾らぐらい?と尋ねてみた。

曰く、両方とも大変な価値があり、値は付けられない。久米島切手は、130 シートしかなく、幻の



第二次通常龍頭切手
 (発行 1950.1.21)
 原画:下地明増

切手だから、値段は一番高い。改定 100 圓切手は、1 万枚ほど発行されたが、アメリカの収集家が殆ど買っていったので、沖縄に残っているのは少ないと教えてくれた。



左: 久米島切手は、1945 年 10 月 1 日、米軍施政権下のもと暫定的に発行された 7 銭切手。

謄写版を用いて印刷され、久米島郵便局長印が押され、130シート発行された。

翌年沖縄民政府ができて、切手発行は停止、わずか7ヶ月あまりの短期間である。

右: 改定 100 圓切手は、1952 年に第 2 次通常 2YEN 圓切手(原画:山元恵一)に加刷(改定)して発行。

発行部数は 10,000 枚だが、アメリカの収集家が大量に買い込んだという。

少年と切手屋との問答は、なおも続く。

「この 2 つ(超高価切手)は、持っている？」

「いや、久米島切手は、持っていない。自分も何回か見せてもらったことがあるけど。・・・」

「改定 100 圓切手は？」

「これなら、持っているが、数枚ぐらいかな(笑)。

だが、マエシロ・イサム会長なら、何シートも持っている。

それに、彼なら久米島切手も、持っているはずだ。

会長の琉球切手のコレクションは、すごいから」



琉球郵趣会長 真栄城勇

この話に、とても驚いた。上には、上がっているものだ。

切手屋親父の 100 倍ほどの琉球切手を持っているなら、値段にすれば、いったいどの位になるだろうか？ 少年の頭では、とても想像すらできなかった。こんな巨万の富を持っているすごい人が沖縄にいることが不思議だった。だが、アメリカ帰り聞き、少し納得した。

先輩に話をしたら、「ああ、マエシロイサムね、聞いたことある。相当切手持っているらしい」と真顔でつぶやいた。マエシロの名声は、仲間たちには広く知れ渡っていた。

だが、誰一人として、彼の姿も、コレクションも見たことなく、謎に包まれた人物だった。

切手少年たちには、琉球郵趣会長真栄城勇は、莫大なコレクションを有し、琉球切手のことなら、何でも知っている切手の神様のようなすごい人だろうと想像を膨らませていた。

高校に入学すると、中央郵便局は遠くなり、次第に足も遠ざかっていった。

それに伴い、切手収集への関心は少しずつ薄れていき、高 2 頃には切手少年から卒業していた。琉球切手の神様マエシロの存在も脳裏から消えていた。

No.2、郵政庁幹部 剥製持ち込み アホウドリ原画 注文

琉球郵便廃止直前 “ 海洋シリーズ第3集 ” 駆け込みで発行？

最初の琉球切手の話に戻る。

琉球郵便は、1972年(昭和47年)5月15日午前零時で以て終息し、復帰を記念した日本郵便の守礼門切手が発行された。以後日本郵便にとって代わった。

1947年から72年日本復帰までの25年間に、琉球切手の発行は261種を数えている。

2005年(平成18年)とある日、琉球切手を久しぶりに眺めていた。

切手それぞれには、越し方のさまざまな思い出が去来する。

記念切手ともなれば格別で、発行年にまつわるできごとまでもが、思い出されてきた。

琉球切手は、戦後激動の時代を、沖縄の人々と共に歩んできた証でもある。

そんな感慨に浸りながら、復帰記念の日本郵便から廃止直前まで4つを順々に見ていた。

- | | | |
|---------------------|----------------|---------|
| ①. 日本郵便 復帰記念の守礼門 | (発行:1972.5.15) | 原画:日本郵便 |
| ②. 琉球郵便最後の喜(ユシ)瓶 | (同:72.4.20) | 同:新垣吉紀 |
| ③. 沖縄返還協定批准記念 | (同:72.4.17) | 同:玉那覇正吉 |
| ④. 海洋シリーズ第3集 海鳥と海と島 | (同:72.4.14) | 同:安次富長昭 |



④の海洋シリーズが、なぜか場違いな感じがした。

①. ②. ③は、既定方針通りの発行だ。

だが、④は何で3番目に発行されたのか。発行日も気になった。

③の返還協定批准記念の6日前、②の最終の喜瓶の6日前である。

琉球郵便が廃止される直前だ。何で、④の「海鳥と海と島」を描いた切手が、世替わり1月前に発行されたのか？ 無理やり押し込んで、かけ込んだとしか思えない。

図案も少し気になった。切り立った断崖岩場に、海鳥が戯れている。

空中を飛翔しているのもいる。「海鳥と海と島」の図案は、何を表しているのだろうか？

それにしても、どこかで見たような光景だ。岬のように尖った岩山が見える。

直感的に、尖閣諸島だ!! 海鳥はカツオドリではないか、と思った。

尖閣諸島に興味を持ち始めた頃だけに、今思うと大変な不勉強、汗顔の至りである。
尖閣諸島といえば、不覚にも、カツオドリしか浮かばなかった。アホウドリは頭になかった(笑)。
当時はアホウドリの写真は少なく、見る機会も少なかったためか？！
それにしても、この切手は、尖閣の島とカツオドリを描いたものか、知りたくなった。

“アホウドリ” 描いてほしい アトリエに 剥製 持ち込む

切手の原画制作者を調べてみたら、琉球大学安次富長昭教授となっていた。
安次富は、切手少年たちが憧れた「琉球三大記念切手」の「琉球大学開校記念」(1952.2)と「琉球政府創立記念」(52.4)の原画を描いていた。
安次富画伯が、この原画を描いていたことを知り、感慨を新たにした。
その安次富へ、電話で訊いてみた。

「そうです。島は、尖閣ですよ」
「尖閣ですから、それなら、カツオドリを描いたのですか？」
「いや、あれは、アホウドリですよ(笑)」
「えっ、アホウドリですって、これはすごい！！」
「郵政庁の頼みは、最初からアホウドリを描いてほしいと注文されて
いましたから、でも、見たことがないので困りましたよ」
「で、どうされたんですか？」
「そしたらね、渡嘉敷さんたちが、アホウドリの剥製持ってきてくれたんです。
これ参考にして、描いて下さいと、置いていった(笑)」
「……………」(驚いて、絶句)
「アホウドリって、ほんとに大きな鳥だったですよ、翼を拡げると三メートルほどでしたか、
部屋(アトリエの意)が、狭くなりましたよ(笑)」。



安次富長昭画伯

アホウドリは見たことないという難題は、琉球政府郵政庁（以下琉球郵政庁とする）幹部が、剥製を持ち込んで解決された。そのアホウドリの剥製は、琉球政府庁舎内の林務課のカウンターに陳列されていたものだという。

安次富の話から、海洋シリーズ第3集「海鳥と海と島」は、島は尖閣を、海鳥はアホウドリを描いたという。間違いなく、尖閣諸島のアホウドリを描いた切手だと知った。
実に素晴らしい。感激で胸が高鳴ってきた。

それにしても、琉球郵政庁は、なぜ「最初からアホウドリを描いてほしいと注文」まで付け、庁長自らが、アトリエに剥製を持ち込んで、切手原画を描かせたのだろうか？

しかも、琉球郵便が消える1カ月前に無理やり、ラスト3番目に押し込み、駆け込んだ形で発行している。琉球郵政庁の強い執念を感じざるを得ない。

なぜ、「尖閣アホウドリ」切手発行に対して、これほど執念を燃やしたのだろうか？

復帰1年前に、琉球大学尖閣諸島調査団が、アホウドリを発見した報道を思い出した。

琉大調査団 71年ぶり 幻の鳥アホウドリ発見 沖縄中 沸き立つ

1971年3月琉球大学尖閣列島総合学術調査団(池原貞雄団長)によって、71年ぶりに、南小島でアホウドリが発見された。この快挙に、沖縄全土が喜びで沸き立った。

これまで待ち望んでいた悲願の大発見だった。

明治期に、アホウドリは伊豆諸島鳥島や尖閣諸島などに数多く生息していた。

羽毛採取で乱獲され、その数は激減していった。世界鳥類学界で、生存は危ぶまれ、その実態は長い間不明のままだった。

1949年米国オースチン博士が伊豆鳥島、小笠原諸島を調査し、地球上からアホウドリは絶滅したと宣言した。

絶滅宣言から僅か2年後、51年伊豆鳥島測候所山本正司所長が燕崎で10羽ほどのアホウドリを発見、世界を驚かした。

石垣島測候所が、尖閣諸島で、“アホウドリを見た”という漁民の話を気象庁に伝えたところ、文部省、文化財保護委員会、マスコミに知るところとなり、大きな反響を呼んだ。

1963年5月、琉球文化財保護委員会は、高良鉄夫博士に委嘱し、尖閣諸島のアホウドリ調査を実施した。

だが、アホウドリの生息はおろか、営巢の痕跡すらなかったと報告された。63年ぶりに、尖閣でもと、国内外から注目されていた調査だけに、人々を大いに落胆させた

1970年12月九州大学・長崎大学尖閣諸島合同調査隊がクロアシアホウドリを北小島で発見した。

翌71年琉球大学調査団は、アホウドリも生息しているのではと、かすかに期待し、調査したら、発見にいたった。

池原貞雄団長は、発見の様子を次のように報告している。

3月31日夕刻南小島中央部の断崖の下で鳥の声を録音する集音マイクに、仔牛の鳴き声のような声が入ってきた。アホウドリの声に酷似しているが、鳥影は発見できなかった。明るる日の4月1日、声の聞こえてきた方向を注意深く双眼鏡で探索した。高さ148mの断崖の7合目高さ約100mの岩棚に6羽の本種がいるのが確認された。さらに断崖を調査したところ、断崖の南端にも6羽いることが認められた。いずれも地形険峻で接近して撮影す



上:アホウドリ発見を報じた新聞(沖繩タイムズ 71.4.2)
下:南小島の険峻な岩棚(○印)と南端に各6羽、計16羽のアホウドリがいた。(池原貞雄 1971)。

ることはできなかった。今回の調査によって、南小島にアホウドリの 12 羽が生息していることが確認された…。黒岩は魚釣島に多数のアホウドリが渡来することを報じ、宮島は5月頃黄尾嶼で10～20羽の本種を見たと報じている。その後尖閣列島の調査を行った正木、高良の報告にも、本種を認めたという記述はない。したがって、南小島にアホウドリの生息を確認した今回の報告は、宮島が1900年に黄尾嶼で10～20羽を目撃したという報告以来、71年振りの再確認の報告になる。

(「尖閣列島学術調査報告」琉球大学 1971年7月)

71年ぶりの、アホウドリ発見の大朗報は、大きな反響を呼んだ。

この快挙に、沖縄中は喜びに沸き立った。

尖閣諸島は、紛れないアホウドリの世界二大繁殖地となった。

この発見は、沖縄が世界に誇るべき事実として、県民に希望と勇気を与えるものだった。

琉球切手は、世替わりで永久に消え失せる。琉球郵政庁の最後の責務として、沖縄の誇りである「尖閣諸島のアホウドリ」を切手に表して、後世に残すべきだと考えたのではなかろうか。

そのためには、原画製作者として誰がふさわしい討議した結果、琉球大学安次富教授に白羽の矢が立てた。これは賢明な選択だった。安次富の力量に加えて、大学同僚の調査メンバーが揃って、北小島でクロアシアホウドリを目撃していた。

これらは、原画製作する上で、大いに参考になる情報を得るのに役立つものだった。



北小島でのクロアシアホウドリの発見に、一同欣喜雀躍して、パチリ、パチリ。
(新城和治 1971)

白い大きな鳥 一目見るなり 胸が高まった 一晩かけて剥製に

アホウドリは、世界的な珍鳥、天然記念物で国際保護鳥に指定されている。

それなのに、なぜ、アホウドリの剥製があったのか、疑問が出た。

南小島で、調査団が運良く死骸を見つけて、剥製にしたとは、とても考えられない。

琉球政府庁舎内に陳列されていたのも腑に落ちなかった。

電話を終えた後、琉球大学調査団が採集してきた生物標本を保管・陳列している琉大風樹館に電話を入れてみた。「アホウドリの剥製はなんかありません」と、期待に反した不要領な返事。

沖縄県立博物館の自然科学担当者へ電話を入れた。

「アホウドリの剥製？ ええ、ありますよ、ワタリアホウドリとコアホウドリの2つがあります」

いずれも本部町立博物館にあり、ワタリアホウドリは、以前は旧政府庁舎内に陳列されたたていもので、友利哲男館長(元名護高校教諭)が剥製にしたとのことだった。

これを譲り受けて現在、同博物館に陳列してあるという。

友利は、鳥の新種ヤンバルクイナの発見者でもあった。

沖縄の鳥類研究の碩学であり、鳥剥製づくりの名人だった。

久米島に飛来してきたコアホウドリも、彼の手で剥製に仕上げていた。

沖縄本島北部の海洋博記念公園近くにある本部町立博物館を訪ねた。

件のワタリアホウドリは陳列されていた。大きくてかわいい。

友利哲夫がこの剥製をつくったのは27年前だった。

剥製づくりに至った経緯を聞くことができた。

あらまは次の通りだった。

70年の夏頃？ 遠洋漁を終えた1隻のマグロ漁船が洋上を航行していた。

2羽の大きな白い鳥が空中を飛翔していた。

鳥は近づくと、突然漁船を目がけて、急降下して、甲板へ舞い降りてきた。

船員は捕らえようと棍棒で殴打し、2羽ともうち殺してしまった。

珍しい鳥なので、剥製にしたいと思い、冷凍庫に保管した。

栈橋に着くと、急いで剥製屋を探したが、見つからない。

困り果てたあげくの末、琉球政府林務課へ持ち込こまれた。

そこでアホウドリではないかと判断され、大騒ぎとなった。

しかもつがいである。大きいのがメスで、小さいのはオスだった。肉も傷みかけている。急いで剥製にしなければならなかった。

急遽、友利が呼び出された。彼は鳥剥製づくりの第一人者だった。

その鳥を一目見るなり驚いた。



ワタリアホウドリ剥製(友利哲夫製作)
沖縄県本部町立博物館に展示。
(編纂会 2005)

胸は高鳴った。まさしくアホウドリだ。身体や嘴の特長からワタリアホウドリだと分かった。これらは南半球に生息し回飛している。とすると、捕獲したのは沖縄近海ではなく、南半球オーストラリア沖近くではないだろうか。

尖閣列島で発見されたアホウドリとは種類が異なる。

それでも、まぎれないアホウドリの仲間だ。こんな幸運なことはない。

アホウドリの剥製がつくれるなんて、夢のようだ。

足は折れている、時間もだいぶ経ち、肉も腐り、羽も抜け落ちかけている。ともかくも、急いで処置をしなければならぬ。

トラックで、彼の住まいへ運ばれた。羽を拵げただけでも 2,3 メートルになる大きなものだ。

しかもつがいである、仕事部屋は手狭くなった。

不眠不休で、剥製づくりに取り掛かった。

折れた足は棒で補強した。目玉はガラス球を入れた。

抜け落ちかけた羽を取り揃えれば、もう出来上がりである。

船員は出来上がった剥製に大満足だった。

大きい方のメスを持ち帰って、小さなオスはお礼にと置いていった。

それが農林局林務課カウンターに陳列されていたものだった。



時間も経過して足は折れ、肉は腐り、羽も抜けかけていた。徹夜して剥製に急ぎ仕上げたと語る友利哲夫館長。(同上)

剥製 尖閣の写真 基に 見事 図案原画 仕上げる

琉球郵政庁幹部は、その剥製を借り受け、原画制作者の元へ持ち込んだ。

安次富は、繁々と観察した。アホウドリは大きい、しかも美しい鳥だ。

この剥製を参考にすれば、止まっている姿は描ける。

だが、飛び立つ格好は分からない、飛んでいる姿は描けない。

尖閣諸島に生息しているというが、鳥の様子は想像もつかない。

どの島に、どんな場所に営巣し、棲息しているのだろうか？

どのような姿態で戯れて、くつろいでいるのかも、見当もつかない。

池原貞雄団長や新納義馬教授らから、この時に撮った写真を借り受けた。

アホウドリは南小島の断崖中腹の岩棚にいた。双眼鏡で確認できた。

険阻な岩崖なので近づくことはできず、写真姿は撮れなかった。

だが、北小島で、クロアシアホウドリが戯れている様子は撮っていた。

池原や新納らは、その写真を示しながら、アホウドリの特長と島の様子を説明した。

尖閣列島は東シナ海の洋上に浮かぶ絶海の孤島、険阻な島だった。
海域は、波浪も荒く、人も寄せ付けず、魚族は豊富であるという。
海鳥楽園の南・北小島は、人踏を阻む奇岩怪巖からなっていた。
その南小島の鋸立した断崖中腹の岩場に、アホウドリは営巣していた。

安次富は、尖閣の「海鳥と海と島」のイメージを大きく膨らませていった。
「波濤が押し寄せる尖閣の紺青の海」「上空を飛翔、岩場で戯れるアホウドリ」「鋸立した険阻な南小島と隣接した北小島の尖塔」を、構図いっぱい描き上げた。
海洋シリーズ第3集原図は、色鮮やかで、素晴らしいでき映えだった。
ここからは、この原図からなる切手を、「尖閣アホウドリ」切手と呼ぶことにする。
かくして、「尖閣アホウドリ」切手は、誕生したのである。
国際保護鳥アホウドリを描いた切手としては、世界第1号ではなかろうか。



- ①、安次富画伯が描いた海洋シリーズ第3集原画（沖縄県立博物館所蔵）
 - ②、北小島の斜面岩場に戯れるクロアシアホウドリ（新納義馬 1971）
 - ③、アホウドリが棲息している南小島の断崖岩棚（○印）。（「ウェブサイト」より）
このことから、以下のことが分かる。
- ①のアホウドリが棲息している岩棚の構図は、②に似ていることが分かる。
また、①の尖塔は、③の北小島の尖塔群（右端）を表現しているようだ。

（続く）